

No. 313

> 開嘉会小文婆小本日

全 仏

11/60



臨濟禪花園妙心寺ハワイ開教院

臨濟宗妙心寺派のハワイ別院は、マウイ島下パイアに昭和27年11月に開創された。毎週日曜日に信徒が集まり奉仕活動等を行っているが、今後は、禪堂建設等の各種計画案があり、一層の充実が期待されている。(写真提供・臨濟宗妙心寺派宗務本所)

全日本仏教会

第18回

日本仏教文化会議開く

テーマ

愛——現代人の忘れていているもの——

第十八回日本仏教文化会議は、十月三日、神奈川県横浜市
の横浜国際ホテルを会場に開催された。本年は「愛——現
代人の忘れていているもの——」をテーマに、約二百名の参加者
があった。

現代人の忘れていているもの



中村元議長 が基調講演

〈開会式〉

川田文化部長の司会で始まった開会式
は、午前十時、矢萩信顕・全日本仏教会
事務総長導師のもと三帰依文を唱和、つ
づいて矢萩事務総長と岡野正貫・国際仏
教交流センター理事長から挨拶が行われ
た。その後、シンポジウムの総合同会を
つとめる武藤義一・日本仏教文化会議運
営委員長（埼玉工業大学学長）から、次
のような開催趣旨が説明された。

愛欲の問題を抜きにして人生は語れな
いが、最近では、試験管ベビーや人の子宮
を借りて自分の子どもをつくるなど、常
識では考えつかないことが次々に起こっ
ている。さらに、ホケ老人の性欲の問題

現代人の忘れていているもの



（上）は壇上に並ばれるパネラーの各先生
（下）は基調講演の中村元議長

が大変な問題となっているように、私の
身の回りには避けて通れぬ問題がある。
どんな新聞や週刊誌にも、今回のテーマ
である愛という字が毎回のごとく出てく
るが、それはドロドロした愛欲の愛であ
る。ところが、キリスト教は愛を説き、
仏教は慈悲を説くといっているが、非常
に次元の異なった高い愛情、慈悲がそ
こに説かれている。本当の愛というものは、
仏教の教える愛、これが何であるか原点
に立返ってもう一度反省してみたい、そ
して、今回の会議を通じて勉強してい
きたいと述べた。

〈基調講演〉

十時二十分から、約一時間にわたって
中村元・日本仏教文化会議議長（東方学
院長）が基調講演を行った。

まず、現代思想では愛を強調し、愛を
前面に出してきているが、これは近代の
黎明と共に始まり、西欧・アジア・日本
共に期を同じくしてその傾向が示され
てきたのであると述べた。

原始仏教では、出家修行者には「愛」
から遠ざかることを説き、世人には愛は
純粹で平等であると説いており、西欧の
中世では、人間の愛に対して抑圧的であ
ったが、やがて愛を重要な精神的価値基
準としてとらえ、愛に対する認識が変っ
てきたのだという変遷を述べた後、仏教
において説くところの「愛」は「崇高な精



会場一杯に熱心な参加の人たち

神として慈悲を説き、慈悲とは、慈ニマイトリ一（友と友との間の純粹な愛情）悲ニカルナ一（あわれみ・同情）で、純粹な愛情であり、母親が幼な児にもつ愛情のように、見かえりや欲望をとまわらない、純粹にして広大なものである」と述べ、「願はくば、全人類のみならず、総ての生きとし生けるものに慈悲の心をしめくくった。

〈意見発題〉

最初に立った寺内大吉氏（作家・浄土宗大吉寺住職）は、長い歴史の中で愛をとらえ、これを高めてゆくものが大乘仏教の愛のありかたであり、仏教が印度から西域を経て中国に入り、その厳しい自然環境の中で大乘仏教が形成されてゆき、

愛に対する認識も変っていった、とその課程を話した。

さらに、仏教でいう愛は造形でなく、行動表情であり、そして、それを生かし、大衆の中に消化させていくのがこれからの仏教の課題ではないか、と意見を発題した。

次に、秋山達子氏（駒沢大講師）が見発題に立ち、愛とは美しいものであり、永遠であり、完全であり、夢があるという期待、そういうイメージが世界的であり、普遍的であるのに、しかし、現実には、永遠とか、完全はないし、時には憎しみとか怨みというものに形が変ることがある、と述べた。

愛は形のないところから生れ、人を愛するところから作り出すイメージであり、おとぎ話であり、夢である。そのイメージは現実には達成されないものの、そのイメージの表裏がわかった時、本当の愛がわかるのではないかと意見を発題した。

〈討議〉

午後からの討議は、各パネラーが意見を述べて始まった。

「部派仏教の中に二百十戒という厳しい戒律があるが、大乘教戒になると五十戒そこそこになっている。これは前進するときのエンジン全開用パワーガンソリとして愛というものをうたっているのではないか」（寺内大吉・作家）

「考え方も行動も違う男女が愛によって結ばれて、その中で自分を磨いてゆくということが、やはり愛の本当の意味で

はないかと思う」（秋山達子・駒沢大講師）

「西田哲学でとりあげたように、あらゆるものは自然にそこにあるのが愛だが、それを自覚するのが知であり、その知は知情意の知ではなくて全人格をあげて知ることであり、そういう意味で知の最高段階が愛である。これは無限の追求である」（峰島旭雄・早稲田大教授）

「仏教は個人の修行が中心のテーマになっているといわれるが、同時に、釈尊や大乘仏教は他者とのかわりあいの強調をもしている。しかも現在は、仏教が大衆とどうかわからなければならぬか、大きな問題提起とされている」（石上善應・大正大教授）

「性愛と性欲との違いをよく理解していない人が多いが、釈尊が否定したのは性欲ではなくて愛着・執着であり、特定の男性や女性をもつてはいけない、そういう意味で私は、愛というものは平等に人間、生きもの、あるいは他のものに対してかけるものと考え」（花山勝友・武蔵野女子大教授）

このあと、総合司会の武藤義一氏から種の保存上不可欠の性欲・性愛の問題、出家者の妻帯問題、愛情の根源は母親かなどの問題提起が行われ、これに基づいて意見が交換された。そして、現代社会では言葉の混乱があり、愛についてもコンセンサスを仏教徒がもたなければならぬといえ、愛を一般の人にもわかりやすい意味での仏教的言葉にしたいという提案がなされた。

これを受けて、「誠という言葉で愛をあらわせたらいのだが」「現代に求めたい愛とは、未来を信ずることであり、今日という現実の中で明日を信ずることが愛である」「愛という言葉の代りに、相手を思いやるということニナム一を使いたい」などの意見が述べられた。

最後に、「言葉を見直しい機会だが、言葉ができたからそれでいいというのはなくて、何故ここで新しい言葉を強調しなければいけないか、ということこそが、このシンポジウムを開催した大きな問題である」と、武藤義一氏が結ばれた。

〈閉会式〉

午後四時、愛について考える機会を与えてくれた討議も終了した。井上日宏・全仏国際文化局長が閉会の辞を述べた。

第17回会議の記録

出版されました

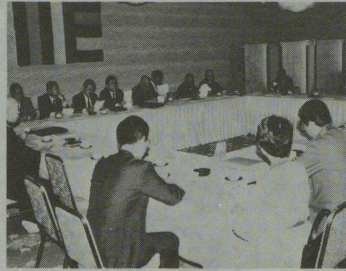
昨年十月、「いのちの尊さを教えるには―仏教の教育観―」をテーマに、京都で開催されました第十七回日本仏教文化会議の記録が本となりました。

『いのちを教える―仏教者からの提言』（法蔵館刊・定価二二〇〇円）というタイトルで出版されましたが、本書は当会文化部でも取扱っており、代金後払い、送料は当方で負担しますので、どうぞお申し込み下さい。

昭和60年11月1日

全仏常務理事会を開く

予算など二議案を審議



開かれた常務理事会

全仏の常務理事会は、十月十四日午後一時から、京都グランドホテルで開催された。矢萩事務総長並びに阿部理事長挨拶、阿部理事長導師のもと三婦依文唱和の後、議長に阿部理事長、議長録署名委員に朝日泰峯、若山運法の両師を選んで議事に入った。

議案第一号「昭和六十一年度予算案編成の基本方針について承認を求める件」野口事務次長上程。剛山財務部長から説明。事務局原案を承認。

議案第二号「部落解放基本法制定について」部落解放基本法制定要求国民運動中央実行委員会」よりの協力要請の承認を求める件」中村組織局長上程。朝日常務理事が部落解放基本法制定要求国民運動中央実行委員会からの協力要請の主旨説明を行い、齋藤組織部長が補足説明をした。事務局原案を承認。

議案第三号「靖国神社問題に関する今後の対応について意見を求める件」野田総務局長上程。小山時局対策部長から説明。靖国神社問題に関する委員会をつくることになった。

報告事項
①昭和六十一年度税制改正に対する要望書提出について
②「同和推進に関する教学研究懇談会」(仮称)について
③本会の目的・事業・構成等を改革するための委員会報告
④ルンビニー復興日本仏教徒委員会実行委員会報告

担当局長部長から報告が行われ、また、報告事項③については、能邨英士・全仏

各地で仏教徒大会にぎやか

本年も秋に入り、全仏大会をはじめとして各地で仏教徒大会が盛んに開催されている。

九月二十八日には、「目ざめよう仏陀の教え、見つめよう未来のサンガ」をテーマに、大阪府仏教会と大阪府仏教青年会の主催で第二十二回仏教徒大会が開催された。当日は、北御堂(浄土真宗本願寺派津村別院)を会場に、仏教思想家ひ

改革委員より、これまでの委員会の経過説明が行われた。

宗教法人セミナー

十一月は栃木、神戸などで開催

昨年度に引き続き、本年度も各地で「宗教法人セミナー」課税強化へ対処するために開催されています。すでに、高知、岐阜、長野、大分、福岡、岡山、茨城の計七会場で開催されましたが、今後は左記の予定で開催します。

- 十一月七日 栃木
- 八日 群馬
- 二十二日 神戸
- 二十八日 和歌山

尚、セミナー開催に関する件、並びにお問い合わせについては、全仏時局対策部までお願いします。

ろさちや氏が「日本人と仏教」と題して講演を行った。

十月三日は、静岡県仏教会が「充実した一日のくらし」をテーマに、第三回静岡岡県仏教徒大会を浜松市福祉文化会館で開催した。荒金天倫・臨済宗方広寺派管長による「日は好日」という記念講演、続いて、暴力追放推進大会が行われた。九日には、埼玉県仏教会が第八回埼玉

県仏教徒大会を、「仏教を現代に活かそう」のテーマのもと、岩槻市立福祉会館で開催した。記念講演には、小松原賢普・真言宗豊山派前管長が「教育と仏心」と題して行い、また、「仏陀の生涯」という映画を鑑賞した。

そして十九日には、第三十一回長野県仏教徒大会諏訪大会を、長野県仏教会が「人みな仏子たるの尊厳に目覚め、人権平等の意識を昂揚し、家庭と社会に慈悲の菩薩行を實踐する」を大会テーマに、諏訪市文化センターで開催した。記念講演には、大阪・太融寺住職の麻生恵光師が行った。

なお、第三十二回全日本仏教徒会議徳島大会については、次号にて御報告いたします。

寺院用具

浅草通り五鳳会加盟店

株式会社 決田商店

東京都台東区寿2-10-9 (地下鉄田原町駅前)

電話 代表 (841) 4965

私たちは、いまのところ、目や耳がふさがれているわけではない。日々の新聞・テレビ・出版物等はいやというほど、世界の現状を知らされている。世界が決して平和ではなく小戦争が続いていること、核戦争による人類絶滅の危機が迫っていること、世界のあちこちにひどい人権侵害が起こっていること、日本においても、部落差別があり、小中学校の中で「いじめ」が広がっており、外国人の指紋捺捺問題があ

同和推進のために

教団内で実践活動を励起するために

新聞 智 照 (全仏同和委員 日 蓮 宗)

そして理念としては「仏教の精神によらなければ真の解決はない」と語ってはいるが、具体的方策となると、何をどうするかという手がかりもわからず、何となく自分と一歩はなれた問題で、いま今日手をつけることは見送って、傍観してしまおうという結果を招いている。もちろん、いつまでもそうであってはいけないので、何か一つ手がかりを見つけ、動き出すことから、私たちは始めなければいけない。難民救援への参加でも

きてこない(あるいはかかわりがあっても見えない)人にとつては、どう取りくむかがわからないように見える。活動している人から見れば、実にはがゆく嘆かわしいと見えるかもしれない。しかし先覚的な実践活動をしている人が、「無自覚」の人を叱りつけ非難してもだめであろう。部落問題をうっかり口にするのはコワイという、古いタブー感情をまだ残す人もいるし、何かしたいとはひそかに思っている者も、声をはりあ

問題を掘り上げてゆき、地道な学習活動を自由な雰囲気の中で続けていくことが大切であろう。そして同和問題を、孤立した一つの特殊な問題領域にとらえず、普遍的な「人権」の問題として、国内国際のさまざまな人権問題とともに考える視野が必要であろう。原理的には各宗教義における人間平等の理念の再確認、「日本国憲法」や「世界人権宣言」の読み直し、現実問題としては自分たちが組織している教団内の平等と差別の問題を、僧階や法名の階層の可否にいたるまで話し合っ、基本的に人権感覚を身につけ磨いていくことが必要であろう。そのことが同時に、仏教の平等観に深く入っていく修行となり、信心となるであろう。それが身につけていけば、ひるがえって同和問題に対するとき、適正な考え方と行動ができるにちがいない。

ることなどが、報道され論じられ、耳目に入っている。そして、それらの事件や問題が、仏陀の教えにそむく反仏教の性格をもち、なぜかわしい末法の様相であると、すべての仏教者が感じているであろう。にもかかわらず、多くの仏教者は、それは放っておけないとする実践活動に積極的にとりくもうとはしていない。正直な話、日常の教化活動、個人生活の中で、話題としてとりあげはするが、

よいし、核廃絶の署名運動でもよい。一歩ふみ出したところから、次のやるべきことが見えてくるし、手をつなぐべき仲間のつながりもできてくる。平和・人権・環境などの各種の問題が、別個に見えていたが実は同じ一つの根から出ているつながりも見えてくる。そのつながりの中で同和問題も見えてくるであろう。同和問題は、とくに多くの仏教者にとって、実践活動にとりかかりにくい問題であろう。日常生活の中がかかわりがで

げつめよられると、立ちすくみ、貝のよう口をとじてしまい、かえって機会を失う。いま仏教教団の中で必要なことは、同和問題が自分とどうつながるか、どう考えるか、何をすべきか、を卒直に自由に論じあえる場をもつことであろう。各教団内部での学習・研修・討論の場では、差別発言が時には相次いでもいい。その人は内心ではそう考えているという現実を、おたがいが出発点として、理性的に

教団の中で、同和に限らずあらゆる問題を自由に討議する場を持つ(私の所属する日蓮宗では教化研究会がそれに近い)。その中で平和・人権・環境等の現代社会の課題を積極的に議題に入れる。その中で重要問題として同和も考えていく。という大きいうねりを起こすことが必要であろうと思う。

自著紹介——長谷川正浩 (全仏顧問 弁護士)

お寺と税務調査

このたび、全日本仏教会顧問弁護士である長谷川正浩先生が、『お寺と税務調査—信仰の自由を守るために—』(文化書院刊・定価一八〇〇円)を出版されました。長谷川先生には本誌の「法律相談室」で毎回答を願っています。尚、本書についてのお問い合わせは、全仏時局対策部までお願いします。

昭和五十六年十一月の法人税法基本通達の大改正と機を一にして各地の寺院に税務調査が入るようになりました。私は全日仏の税務委員の一人としてこれに如何に対応するかを常に考えさせられてきました。これは一つの紛争を解決するということではありません。全国八万ヶ寺の問題としてこれを解決する必要があります。課税当局の調査の行き過ぎが目につくことも事実でした。

一方、寺側が批判されても仕方ないことも多々あります。この双方をとり除くことが、課税当局にとっても、寺側にとっても不可欠だと思えます。その為に私たちはどのようなことができるのか。これが本書を著す動機の一であります。課税当局の行き過ぎはこれを正しく指摘して改めてもらう必要があります。もちろん見解の相異も多くありますが、指摘することによって相互理解が深まることになり、納得のいく納税ができることでしょう。そのために理論と現場の橋渡しをしたのが本書です。私はとりわけ税法理論に造詣が深いわけではありませんが、しかし、理論と現場をつなぐということ

は弁護士という実務家の仕事です。というわけで、この本は多くの方々の理論的成果を、お寺の税務調査という特殊な場にあてはめ応用したものにすぎません。お寺を調査する人の質問検査権の限界について多くを引用しました。課税当局の見解も合わせて載せましたので、調査をうける場合に相手の考え方が奈辺にあるかもわかると思えます。全国八万ヶ寺の問題としてこの税務調査をみた場合、もう一つの問題を解決す

る必要があります。即ち、寺側に対する批判を除去するという点、即ち、寺の帳簿の整備です。この点から本書は全日仏税務委員会で編集された財務の手引きを転載させて戴きました。小規模のお寺を前提として記帳の仕方が説明されていますので参考になると思えます。

今、私は簡単な伝票さえあれば複式簿記によるお寺の総勘定元帳が作成されるパソコンのソフトを完成させました。もちろん会計の専門家やプログラマーの協力を得てそれぞれの専門的知識をお寺に應用したものです。忙しい住職が経理事務から解放されれば、それだけ本来の布教活動に時間を費やすことができると考えたからです。

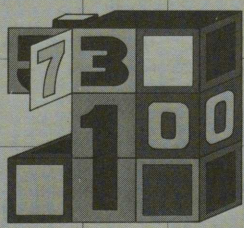
寺と税務調査の問題を総体的に解決する為に準備することは私としてはこれです。

一区切です。あとは色々な人たちの意見を聞きながらより良きものに手直ししてゆくことが残りました。これらが一人でも多くの方々の参考に供されるよう祈るばかりです。

本書はこのような私の考え方のなかで生まれたものですが、直接的には各地の県仏主催の宗教法人セミナーが契機となっています。また、全面的に全日仏事務局の御世話になりました。おさめられた資料は全て全日仏時局対策部のものといっても過言ではありません。改めて御礼を申し上げる次第です。有難うございました。

お寺と
税務調査
信仰の自由を
守るために

長谷川正浩編著



文化書院刊

文化書院刊
B5判・全175頁

住職ノモ帳

天使

「宗教のない教育は、腕のよい悪友をつくる」という有名な言葉がある。人間の成長と教育ということを考えてみると、ものの分別のない幼児期は落ちているものは平気で口にするし、どんな大切なものでもおもちゃにするし、危くみていられない。しかし、大きくなるにつれて、教えられたり叱られたりして、いわゆる分別というものが育ってくる。良いものと悪いもの、美しいものと汚れたもの、必要なものと不要なもの、それを分別する智慧が育ってくる。そして、良いもの、美しいもの、必要なものを求めて人生を歩んでゆくように教えられ、また、それらを手に入れる能力を教育される。しかし、それだけでよいのであろうか。

一年ほど前に、浮浪者を中心、高生がなぐるけるなど暴行を加えるという事件が続いた。警察でのこれら加害者の子供達の取調べで、「汚いから」「邪魔だから」という言葉が一樣に聞かれたという。

彼等は家庭や学校で善なるものを求める役に立つ人間になれと教えられた。悪いものに立たないものの存在は許されないと考えたのであろう。思春期

の破壊的暴力への欲求が正当性を与えられて浮浪者いじめとなった。現在、学校で問題になっている「いじめ」も思想的には同一の根をもっていると考えられる。たとえ有能であってもその人間性が病んでいては救われない。

仏教には無分別智ということが説かれる。分別する智慧は社会生活を営む上には大切なことであるけれども、それが全てではない。最高の智慧は無分別智という。善なるものへは勿論、悪しきものに対しても愛をもって接する。無分別智は大慈大悲の心、そのまま仏心である。この世に不要な存在というものはない。何らかの意味をもってすべての存在が許されている。生きることの上手なもの、また生きることの下手な落ちこぼれのものも、すべて許されて生きている。幸いに善をなせるものも、不幸にして悪をつくるものも等しく許されて生きている。

すべての存在を愛し受け入れて人生するのは、確かに難しいことではあるが、そう願うことはできる。あとは腕のよし悪しである。

しかし、これだけは言えると思う。腕のよい悪友であるよりは、腕は悪くとも天使の方が真実、価値はある、と。

(文化専門委員・福島光信)

良書紹介

『ケーブルカーのであうとき
—わが子に語る人生論—』
西村恵信著

臨済禅の老僧に育てられ、現在は花園大学にあって寺院子弟の教育にあたる著者が、寺庭で子育てをする体験をつづった家庭教育論である。今仏教寺院の子弟は、経済成長後に生まれた人々であり、その親は戦前戦中戦後に生まれ育った人である。そこでは僧侶教育のむずかしさがさまざま指摘され、母親たちは悩んでいる。そうしたとき、本書は寺院へのよい示唆を与えてくれるにちがいない。

(ノンブル社・九八〇円)

著者は、先に『須彌山と極楽—仏教の宇宙観』(講談社現代新書)などによって仏教の宇宙観について説明された。しかしこの本が主に小乗系の宇宙観を述べに止ったのに対し、本書では大乘仏教の宇宙観、さらにはヒンドゥー教の宇宙観を新しい観点から説明している。定方氏の本は、常にすぐれた創意に満ちており、解りにくいことをやさしく、しかも正確に説明される。写真、イラストも楽しい美装本である。

(春秋社・二四〇〇円)

『釈尊の生き方に学ぶ
—スッタニパータ法談—』

『インド宇宙誌』
定方 晟著

『仏教語源散策』
中村 元著

『日本の庶民仏教』
五来 重著

『文化専門委員(順不同・敬称略)
宝田正道、中野東禅、望月良晃、神原帰逸、阿純孝
—推薦—』

由木義文著
「法事とは仏法(法)の教えを私たちの生活(事)にあて、味わってみることだ」とは著者の若かりし頃聞いた恩師のことばだ。本書はそんな事を念頭に置いて、最古の仏典であるスッタニパータを日常生活で味わっている。だから、なるほど、なるほどと思いつつ最後まで読んでしまふ。

(大法輪閣・一一〇〇円)

祖先崇拜や民間信仰など、必ずしも宗義・宗派にとられない庶民の仏教が、日本仏教民俗学の面から、日本独自の文化史を形づくっている点を指摘した著者長年の論稿集。「肉食妻帯」を論じたものなど、注目に値する。

(角川書店・九六〇円)

安い本であり小形であるので、電車の中などで仏教語を知るのに便利である。内容も日常語の一般的なものから、インドの神々などの日本化した仏像などおもしろい本である。

(東京書籍・九五〇円)

文化専門委員(順不同・敬称略)
宝田正道、中野東禅、望月良晃、神原帰逸、阿純孝
—推薦—

昭和60年11月1日

野口事務次長に スリランカから 褒章と博士号

褒章と博士号

本会の事務次長である野口善雄師（浄土宗浄運寺住職）は、このほどスリランカ大統領より同国最高の文化褒章を、また、同国法王アーナンダ大僧正よりダルマスリー（名誉博士号）を各々贈られた。これは、同師の永年にわたるスリランカ国に対する奉仕活動や、同国の角膜提供組織アイ・ターナに寄せた援助行為が認められ、今回の顕彰となったのである。

このような褒章は、日本では過去に、故藤井日達師（日本山妙法寺前山主）に贈られて以来であり、また、名誉博士号が贈られたのは同師が初めてである。

哀 悼

岡田宥秀師

十月十六日、七十八歳で遷化。真言宗醍醐派管長、総本山醍醐寺座主。

訂正 本誌十月号の六頁三段十八行目を左記の通り訂正します。

「ておくといわねばならないからです。」
完全といわねばならないからです。」

『事務局録事』

（十月）

- 二日 同和委員会
- 三日 第十八回日本仏教文化会議

静岡県仏大会出席

七、八日 全仏大会打合せ会（徳島）

九日 埼玉県仏大会出席

正力松太郎第十七回忌法要参列

十四日 常務理事会

十五日 全仏大会幹事会

祐天寺晋山式参列

包管研（京都）

十七日 局内会議

十八日 宗教法人セミナー（茨城）

基本法決起集会準備会出席

十九日 長野県仏大会出席

二十日 関西財務担当者会議

恵光寺落慶法要参列

二十三日 都道府県仏代表者会議

二十四日 第三十二回全日本仏教徒会議

二十七日 築地本願寺記念法要参列

二十八日 関東財務担当者会議

三十日 全仏改革委員会

昭和61年版

全仏手帳

申込み受け中

部数に限りがございますので、御注文はお早めに。

内容 三掃依文、四弘誓願、宗門聖日、加盟団体役員住所録

忌日早見表、その他

サイズ 9×14 cm

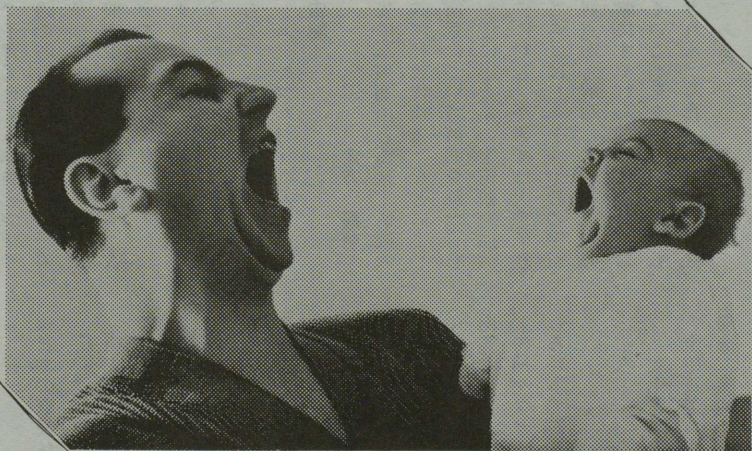
定価 六〇〇円（送料実費）

申込先 東京都港区芝公園四一七一

四 全仏総務局

「全仏手帳係」宛

生活は、体温。



ゆとり、ふくらまそうね。中期国債ファンド

笑っていますか、大きな声で。持っていますか、口ずさむ歌。いきいきエブリデイ。ぬくもりと、ゆとり。大切な貯蓄も、そんな暮らしのためのものでありたいですね。いかがですか、有利さて便利さて、いま注目の中期国債ファンド。毎月複利でふえつづけ、しかも出し入れが自由。みなさんの資金も、上手に活かすなら、ひとまずは中期国債ファンドへ。夢が、ゆとりが、ふくらみます。弾みます。

預ける貯蓄から、ふやす貯蓄へ。

山一證券

〒104 東京都中央区八重洲2の4の1
☎(03)276-3181(代表)

※中期国債ファンドの設定・運用は、山一投信委託 ※お申込みの際は受益証券説明書をご覧ください。

昭和六十年十一月一日発行

発行人 矢萩信顕

発行所 財団法人

全日本仏教会

〒一〇五

東京都港区芝公園四一七一